

[創立60周年]
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第715号] 2022年1月新年号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.715

January 2022

5-17-21-101 Funabashi,

Setagaya-ku, Tokyo

東京バッハ合唱団の創立60周年に寄せて

心をこめて 私たちの祝意と挨拶を

ニック・プフェッファコルン (ブライトコプフ&ヘルテル社長)

親愛なる大村さん

親愛なる東京バッハ合唱団の皆さま

皆さまの素晴らしい合唱団が創立60周年を迎えられるにあたって、出版社ブライトコプフ&ヘルテルを代表して、心をこめた祝辞を呈する機会を与えられましたことは、私の大きな喜びであり名誉であります。

私たちは、ヨーロッパで、とくにJ・S・バッハの故国であるドイツにおいて、東京バッハ合唱団の輝かしい芸術的発展と卓越した演奏活動に、長年にわたり絶えることなく身近に接し、その歩みを見守りつづけることのできる立場にありました。

ブライトコプフ&ヘルテル社は、かつてJ・S・バッハ自身が共に仕事をしたことのある出版社です。バッハの作品の言葉と音には、慰めをもたらし、人をひろく包み込む力があります。それが、あなた方の手によって、かくも見事に日本語に移され、それによって一層広範な人々のもとに届けられようようになりました。ブライトコプフ&ヘルテル社は、そのことに誇りと喜びを感じております。

わけても大村恵美子様へ、感謝申し上げたい。あなたは、バッハの音楽とバッハのメッセージを、60年を超える長きにわたって、日本の地に広めて来られたのであります。

心をこめて私たちの祝意と挨拶を送ります。

ブライトコプフ&ヘルテル、ニック・プフェッファコルン

Breitkopf & Härtel, Nick Pfefferkorn

(訳・森永毅彦)



■ 上掲とあわせて
ニックから届いたカード
(下: 森永訳)

東京バッハ合唱団の60年に寄せて

ブライトコプフ&ヘルテル社は、心の限りを尽くして祝辞を送ります。長年にわたる奇跡ともいべきこの共同作業は、私たちの誇りであり感謝であります。

ニック・プフェッファコルン

ブライトコプフ&ヘルテル

18. November 2021

Liebe Omura-san,
Liebe Mitglieder des Bach-Chors Tokyo,

Es ist mir als Verleger des Hauses Breitkopf & Härtel eine große Freude und Ehre, Ihnen allen die herzlichen Glückwünsche zum 60. Jubiläum Ihres wunderbaren Chores übermitteln zu dürfen. In Europa und insbesondere in Deutschland, der Heimat J. S. Bachs konnten wir über viele Jahre hindurch die großartige künstlerische Entwicklung und die hervorragende Leistung des Bach-Chores erleben und verfolgen.

Breitkopf & Härtel, der Verlag, mit dem J. S. Bach selbst zusammengearbeitet hat, ist sehr stolz und glücklich, dass durch Sie die tröstenden und weitumfassenden Worte und Töne der Werke Bachs so wunderbar ins Japanische übersetzt wurden und auf diesem Weg noch viele weitere Menschen erreicht werden können.

Besonders Dank an Frau Emiko Omura, die Bachs Musik und seine Botschaft über 60 Jahre lang in Japan verbreitet hat.

Unsere herzlichen Glückwünsche und besten Grüße!
Breitkopf & Härtel, Nick Pfefferkorn

[祝賀メッセージについて]

ブライトコプフと東京バッハ合唱団

J. S. バッハと同時代に創業(1719年)の世界最古の楽譜出版社である Breitkopf & Härtel (ブライトコプフ・ウント・ヘルテル)社は、初の「バッハ全集」(1850 創刊-1900 完結)の版元となるなど、19世紀のバッハ復興運動から現在に至るまで、研究と楽譜出版のセンターの一つとして、一貫してバッハ音楽の普及に貢献しつづけています。また、早くからバッハカンタータ・ヴォーカル譜のコレクション(全200曲)を完備し、当合唱団が2000年に、大村恵美子訳詞付きの楽譜(当初は「カンタータ50曲選」として発行)を出版し始めて以来、これに底本を提供して下さっています。

当合唱団のドイツ訪問演奏は、その第1回が1983

月報2022年1月新年号 CONTENTS

- ・月報で60年を振りかえる(大村恵美子) …p.2
- ・バッハ・カンタータの場景 No.8 BWV 147 …p.3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [11] (大野博人) …p.4

年に遡りますが、当時ライブツィヒ（東独）にも拠点をおくブライトコプフ社が、はるばる東洋から「東西の壁」を越えてやってきた東京のバッハ合唱団の、聖トーマス教会での公演を驚きと喜びをもって迎えたことは、社内でも語り伝えられているようです。その後もわれわれは、2009年までに5回のドイツ訪問を果たしています。前ページのメッセージ中に、ドイツにおいても身近に接する立場にあった、と触れてくださったのは、こうした背景によると思われま

す。当合唱団が、向こう10年間で「日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集」（全192曲予定）を完結させる計画を発表したい旨の希望を伝え、交渉をつづけていましたが、年末に全面的な許諾をいただくところです。

創業300年のブライトコプフ社の足元にも及びませんが、その歩みの5分の1に達したことを喜びとします。[編集部]

創立60周年企画

この60年を振りかえる〈1〉

大村 恵美子（主宰者）

2022年の新年を迎え、7月1日が東京バッハ合唱団の創立60周年にあたるのを契機として、新規にこの1月号から、月報紙上で60年を振りかえてみるような内容の連載を考えることにしました。

50周年に至るまで、それぞれの10年の節目に際して、それまでの月報を主なる拠りどころとして、記念の冊子を編んできましたが、そのつど「ここまでたどり着いた。さて、いつまで続くやら……」といった心境で、取りあえずの記録を残しておくことにしたのでした（下掲）。それが、60年を振りかえることになろうとは！

◆10年目（1972年）……『バッハ合唱団の十年』（森井恵美子著・バッハ合唱団出版部 [自費出版/市販]・1972年10月発行・B6判208頁）

◆20年目（1982年）……「小川の水が大海に——東京バッハ合唱団の20年」（現物見当たらず）

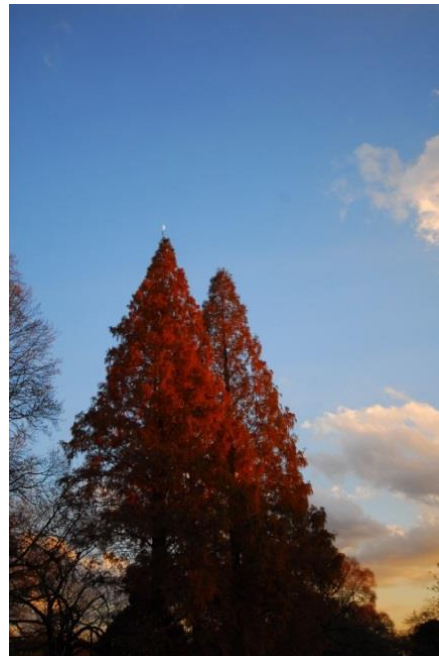
◆30年目（1992年）……『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』（大村恵美子著・国際文化出版社・1992年9月発行・四六判350頁）

◆40年目（2002年）……「東京バッハ合唱団40年の記録」（記念誌編集委員会編・2002年7月発行・B5判302頁）

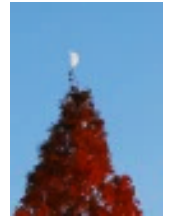
◆50年目（2012年）……「東京バッハ合唱団 半世紀の歩み」（記念誌編集委員会編・2015年3月発行・B5判238頁）

毎月「月報」を発行し、海外演奏ツアーや大曲公演を終えるたびに感想文集や記録を残してきました。作文の苦手な団員も多かったはずですが、協力していただいたことにとっても感謝しています。長いお付き合い

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm



■冬の夕暮れ—新宿御苑。
メタセコイアの先端に半月を配し、クリスマスツリー風にしてみました（写真：千葉光雄・団員）



■部分を拡大。
[イスラム教国の国旗を想わせて、エキキュメンカル! : 編集部]

の方々はお気づきでしょうが、この合唱団の活動は、歌うこと、合唱することを楽しむだけにとどまらず、いろいろ思い、考えることを重視しています。それを余計と感じた方がいらしたことも事実ですが……。

私がバッハのカンタータをうたう合唱団を作ろうと思ったその初めから、なんの迷いもなく日本語で歌うものと決めていましたが、半世紀以上まえの当時、西洋音楽は原語で歌うものという「常識」（偏見というべきでしょうか）は、今日以上に根強かったでしょう。でも、それに「抗して」という意識は微塵もありませんでした。30年目の記念誌を「反権威主義」と題した章から書き始めた私でしたが、使い慣れた言葉で歌うのは「当たり前」だと思っていたのです。いつだったか、杉山好さん（ドイツ文学者、シュヴァイツァー『バッハ』の訳者の一人、故人）が、この合唱団のやっていることは市民運動です、と仰っていました、強いていえば「バッハ運動」でしょうか。

60年目の記念誌が、「紙」なのか「電子」になるのか分かりませんが、いずれ日の目を見ることも期待しています。今は、次号から、40年目の記念誌所載「東京バッハ合唱団40年の歴史年表」（編集：山下広之）などを参考に、私の記憶を大雑把にたどってみることにしますので、しばらくお付き合いください。

久しぶりに練習場を訪れたOB、OGの方々が「合唱に通っていたころとほとんど変わらない、それが何よりもうれしかった」といった通信をお寄せになるので、私も安心して喜んでいます。今年も同じように、それがマンネリではなく、幸せを永久に保存しながら、であるようにと祈り、期待しています。退団・休団された先輩方も、時々練習場をのぞいて、「若返り」をしていただけますように。

実りゆたかな新年が、私たち、皆様お一人お一人の上に開けますように——これが年明けの私の深い祈りです。[次号へつづく]

バッハ・カンタータの場景 № 8

大村 健二 (団員)

創立 60 周年記念公演の曲目 (3)

■カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》

Herz und Mund und Tat und Leben BWV 147

【教会暦】 マリアのエリサベト訪問の祝日 (7/2 固定) (他に BWV 10)		
【徒書】 イザヤ 11, 1-5 (メシア到来の預言)		
【福音書】 ルカ 1, 39-56 (マリアのエリサベト訪問、讃歌)		
【成立】 原作初演 (BWV 147a) 1716 年 12 月 20 日 (待降節第 4 日曜日)、ヴァイマル。改作初演 1723 年 7 月 2 日 (教会暦上記)、ライプツィヒ。		
【歌詞】 台本 S. フランク (原曲とも)。6) 10) M. ヤーン作コラール Jesu, meiner Seelen Wonne (イエス わが心の愉しみ) (1661) 【BCH-78】 第 6, 16 節。		
【上演用訳詞】 大村恵美子 http://bachsmusik.starfree.jp/bwv147.htm		
【編成】 独唱 SATB、合唱、トランペット、オーボエ 2、オーボエ・ダモーレ、オーボエ・ダ・カッチャ 2、弦合奏、通奏低音		
【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成(略語)/調
第 1 部		
1. 合唱	心と日々のわざもて Herz und Mund und Tat und Leben	tp, ob2, str, bc ハ長調
2. レチタティーヴォ(T)	幸なる口よ Gebenedeiter Mund!	str, bc
3. アリア(A)	惑わず 心よ なが主を証しせよ Schäme dich, o Seele, nicht	oba, bc イ短調
4. レチタティーヴォ(B)	貴き主の腕(かいな)すらも Verstockung kann Gewaltige verblenden	bc
5. アリア(S)	備えたまえ 主の道を Bereite dir, Jesu, noch itzo die Bahn	vn solo, bc ニ短調
6. コラール(合唱)	主は われにいます Wohl mir, daß ich Jesum habe	ob2, str, bc ト長調
第 2 部		
7. アリア(T)	主イエスよ 力を賜え Hilf, Jesu, hilf, daß ich auch dich bekenne	vc, bc ヘ長調
8. レチタティーヴォ(A)	いと高き者は ひそかに働きたもう Der höchste Allmacht Wunderhand	obc2, bc
9. アリア(B)	主のみわざを歌わん Ich will von Jesu Wundern singen	tp, ob2, str, bc ハ長調
10. コラール(合唱)	イエス わが喜び 心の慰め Jesus bleibet meine Freude	ob2, str, bc ト長調
(演奏時間 34 分)		
【上演履歴】 1964 (#5)、1965 (#7)、1974 (#31)、1985 (#59)、2005 (#97) 2011 (#105)、2022 (#121) 予定		
【日本語版楽譜発行】 2004 年「50 曲選」、ISBN978-4-925234-44-7 (¥2100)		
【録音】 CD「50 曲選」Vol. 17 (2005 年録音、#97)		

聖母マリアに捧げるバッハの作品 (下)

さて、いよいよ「カンタータ 147 番」を取りあげます。この「147」について、一言だけおしゃべり。

むかし「カフェハウス・バッハ」という喫茶店があって、近所の東京農大のオケの連中がよく出入していましたが、彼らが「イースーチャー」と呼んで、例のコラール(わが国では「主よ 人の望みの喜びよ」と訳され、流布している)を愛していたのです。中国語か麻雀語かでこう発音するのだそうです。勉強になりました。われわれの合唱団でも、近年、新人が現れると「イースーチャー」を歌って歓迎することにしています。

この作品 BWV 147 は、マリアのエリサベト訪問の祝日用カンタータです。先月号では、マリアがイエスを身籠ると天使に告げられた、その記念の祝日用の曲(BWV 1)をご紹介しましたが、本日の曲は、そのイ

エス・キリストに先駆けて道を備えた洗礼者ヨハネの誕生にまつわる話で、新約聖書「ルカ伝」では、マリアの受胎告知の記事に続きます。

身籠ったマリアが遠縁にあたるエリサベトを訪問して彼女に挨拶をすると、それを聞いたエリサベトの胎内でも胎児(成人して洗礼者ヨハネ)がおどった。聖霊に満たされたエリサベトが「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました」とマリアに告げると、彼女は

わが心 主を崇(あが)む

わが魂は頌め讃(た)とう

救い主なるわが神をば (大村恵美子訳)

と、讃美を歌いはじめるのです。古来「マニフィカト」(ラテン語で「わたしは崇めます」の意)と呼ばれる讃歌に他なりません。この讃歌全体をそっくり歌詞とした曲がバッハにあります(BWV 243)、それは別の機会に触れることになるでしょう。

ところで、表題ともなる第 1 曲冒頭の〈心と日々のわざもて〉は、原詞では Herz und Mund und Tat und Leben であり、「心」[ハツ]と「口」[ムト]と「行ない」[タト]と「生きざま」[レーベン]が、接続詞 und [ウント](英語の and) で串刺しになって、全体 8 音節の句が、歯切れのよい、印象的なリズムを形成している(譜例)。



そこへ「こころとくちと」だけで 7 音節を要する日本語をどう当てるか、思案のしどころとなりますが、見てのとおり訳詞者は「口」「行ない」「生きざま」までを〈日々のわざ〉と括ることで解決しました。卓抜な力技であろうと思いますが、ここでのフランク歌詞の内容では、第 2 曲で〈幸いなる口よ〉と呼びかけ、その後も、

〈なが主を証しせよ〉(=言い表す、第 3 曲)

〈われもなれを証しせん〉(=言い表す、第 7 曲)

〈み名も知らぬに〉(=ヨハネがまだエリサベトの胎内であって、その口では言い表わしていないが、の意)

〈マリアの口はほめうたをば献げ〉

〈口もて主を証し得ずば〉(以上、第 8 曲)

〈主の約せし愛は 弱き身と口を……強めん〉(第 9 曲) といった具合に、「口に出して言い表す」ことが主題になっていますので、歌う者にはこれ(「口」Mund)の重さを聴衆に伝える(=言い表す)努力が求められます。

それにしても、なんと明るい、祝福に満ちた作品でしょう。2 部構成の前半にはアルトとソプラノの、後半にはテノールとバスの、それぞれ女声と男声の 2 曲ずつのアリアを配し、そのいずれをも、お馴染みのマルチーン・ヤーンのコラール(1661、旋律はヨーハン・ショープ編 1642)が受け取って、締めくくります。終結句は〈イエス君のもと われは離れじ〉。

寅さんの普遍性

安曇野閑人 大野 博人

フランスから新刊本が届いた。Le Japon vu par Yamada Yôji (山田洋次が見た日本)。寅さん映画などで知られる巨匠、山田洋次監督についてのノンフィクション。

90歳になる監督の人生と作品を詳細に記述した750ページに及ぶ大著で、本人や映画ポスターの写真もたくさん掲載されている。本格的な山田洋次論である。

送ってくれた著者のクロード・ルブラン氏は、フランスの国際報道専門メディアの編集長なども務めたベテラン・ジャーナリストで、専門はアジア、とりわけ日本については知識も取材経験も豊富だ。日本語も堪能で、毎日、日本の新聞も読んでいます。

私にとってはパリに赴任した25年ほど前からの友人である。パリでは毎週、日本食屋でとんかつ定食を食べながら日本とフランスの時事問題について議論をした。

その彼は、熱烈な寅さんファンなのである。

本の最初のページには、私宛の手書きで「心血を注いだ作品だ」とあった。

日本映画への造詣が深く、記事で紹介するだけでなく、多くの作品をパリで上映する活動にも取り組んでいた。その彼が5年ほど前に、フランスでとくに広めたいのは山田洋次監督の作品なんだと熱をこめて語った。そのとき、私が『男はつらいよ』を?とちよつとためらいがちに反応したのを彼は見逃さなかった。

「あのね、寅さんは日本人にしかわからない、とか、その心情はとても日本的だ、とか思ってるのは、日本人だけだからね」と諭された。

日本のローカル色が際立っていても、底に流れるメッセージが普遍的であれば、どこの国の人だって共感する、というわけだ。たしかに、ドイツの作曲家バッハの作品に日本人が感動しても、私たちは不思議だと思わない。なのに、フランス人から寅さん映画はすば

らしいと聞いてとまどうのは変だ。

フランスで日本映画の人気は高い。黒沢明や小津安二郎、大島渚などはすでに古典の扱いだし、若手の多くの作品も高い評価を得ている。しかし、山田監督作品はよく知られているとはいいがたい。フランスでの日本映画の評価がある種の芸術性に傾きすぎていることに、ルブラン氏は不満を感じてこの本に「心血を注いだ」のだという。

もらった本に刺激されて、久しぶりにネット配信で寅さん映画を1本見た。第15作の「寅次郎相合い傘」。マドンナは浅丘ルリ子演じる旅回りの歌手リリー。そこに、気づまりな会社や家庭での日々とうんざりして家出した中年サラリーマンがからむ。

いわば、定住民社会の中で、あちこち放浪する遊牧民として生きている人(寅さんとリリー)、そしてそれに憧れを抱く人(中年サラリーマン)の物語だ。

会社や家族、地域の中で自分の立ち位置を変えたくても変えられないたくさんの方が、この作品に共感するのはよくわかる。安定していても不自由な現実の人生と、不安定でも自由な人生への夢。その間で揺れ動く自分の心情を重ねるのだろう。だとしたら、そのメッセージは日本社会を超えて届くし、時代が変わっても自分のことと感ずる人はいる。

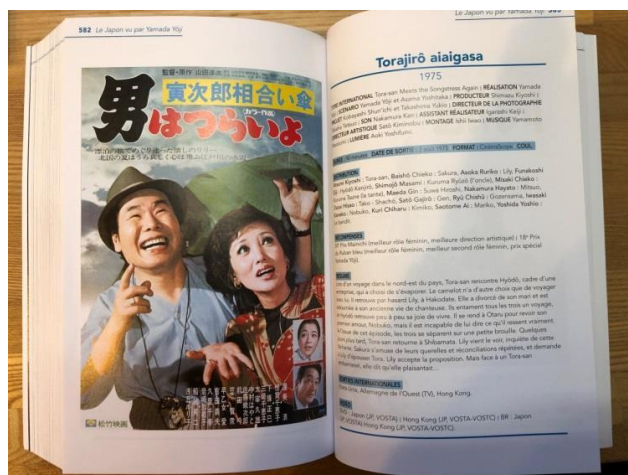
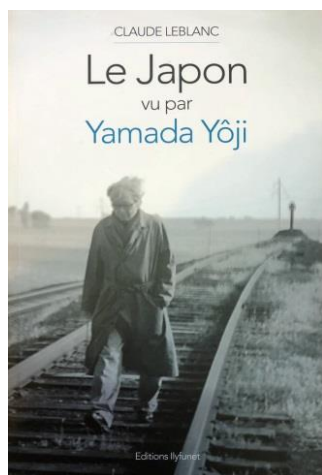
私も長い間、同じ会社に勤めた。その意味では定住民の社会に属していた。ただ転勤で2、3年ごとに住む場所が変わった。しかも外国に出ると一人で仕事をするのがふつうだった。意図したわけではないけれど、いつのまにか少し遊牧民の気分にもなっていた。そのせいか、東京の本社勤務が続いた最後の10年ほどは、いつもどこか知らないところに飛び出したいという気持ちがくすぶっていた。

会社を辞めて安曇野に移り住んだのは、「縁もゆかりもないところなのに」ではなく、「縁もゆかりもないところだから」なのかもしれない。

本を読み、映画を見ながら、そんなことを考えた。

月報の貴重な1ページに勝手なことを書き連ねている拙文への「お便り」を先月号で拝読し、感激するやら恐縮するやら。でも読んでいる人がいるとわかると

張り切るのはブンヤ根性の名残でしょうか。「豚もおだてりや木に登る」ということわざ(そんなことわざあったっけ?)が頭をよぎりましたが、新年もよろしくお祈りします。(団友・後援会員、元朝日新聞記者。写真提供と説明も筆者)



■左：友人が送ってくれた本の表紙。
■右：この山田洋次論では、ほとんどの作品が詳しく紹介されている。